

京都市伏見区深草「仁明陵北側地点」出土埴輪の検討

—「仁明陵北古墳」と「深草瓦町古墳」—

辻川 哲朗

1. はじめに

同志社大学歴史資料館には「深草遺跡」出土とされる埴輪資料（以下、本資料）が収蔵されている¹⁾。本資料は、後述のとおり、1958・1960年に実施された名神高速道路建設に伴う事前調査として、酒詰仲男氏（当時同志社大学教授）が担当した「仁明陵北側地点」（酒詰1960）における発掘調査で出土したものである。残念なことに当該調査の正式報告書は未刊であり、概報・略報（酒詰他1959・1960、波多野1960）の記述も限定されていたため、その実態がひろく正確に共有されたとはいえない。また、市街化の進行が迅速であったこともあって、当該地域をふくむ山城盆地東部～東南部の古墳時代関連資料は十分とはいいがたい状況にもある（宇野2009等）。

筆者は本資料を実見する機会をえた。その結果、本資料は遺構との関係を確定しがたい資料ではあるものの、一定の一括性をそなえた資料群であり、当該地域の古墳動向等にたいする従来の認識に付言しうる点があることがわかった。そして、その内容を提示することは、当該地域の古墳時代を検討するうえで、多少なりとも益するところがあるのではとかがえるにいたった。

よって、本稿の主たる目的は、本資料の内容を報告し、当該地域の地域史復元に資することにある。以下、まず本資料出土の契機となった当該発掘調査の内容を確認したうえで（2章）、本資料の内容を報告し（3章）、それにもとづいて派生する課題—帰属先にかんする従来の認識がもつ課題と、本資料が当該地域の古墳動向において有する意味—について検討する（4章）。

2. 名神高速道路建設に伴う発掘調査の概要—1958・1960年調査—（図1・2）

本章では、本資料出土の契機となった1960年調査をたどり、出土経緯・状況を確認する。なお、本資料はおもに1960年調査で出土している。しかし、後述するように1958年にも少数の埴輪が出土していることにくわえて、両年度の調査はその経緯や内容からみて一連の調査であるとかがえる。よって、本章では両年ともにあつかうことにした。

1958年の調査 名神高速道路建設に先だち、路線内の遺跡を対象とした事前発掘調査が実施された。京都市域で実施された数か所の調査地のなかに深草地域の遺跡もふくまれており、その一つが「仁明陵付近発掘区」であった。当該調査については、概要報告書（酒詰1959、以下「概要報告」）が刊行されている。それによると、調査地点の選定には、文献史料や採集遺物にもとづいて近辺に想定されていた平安期寺院—貞観寺址・嘉祥寺址の所在を探索することが主目的とされたことがわかる（図1—④・⑤）。くわえて、近世以来一帯では古墳関連遺物の出土が記録・伝承され、出土遺物の一部も伝世されており、これらの遺物が出土した古墳の探索も目論まれていた。

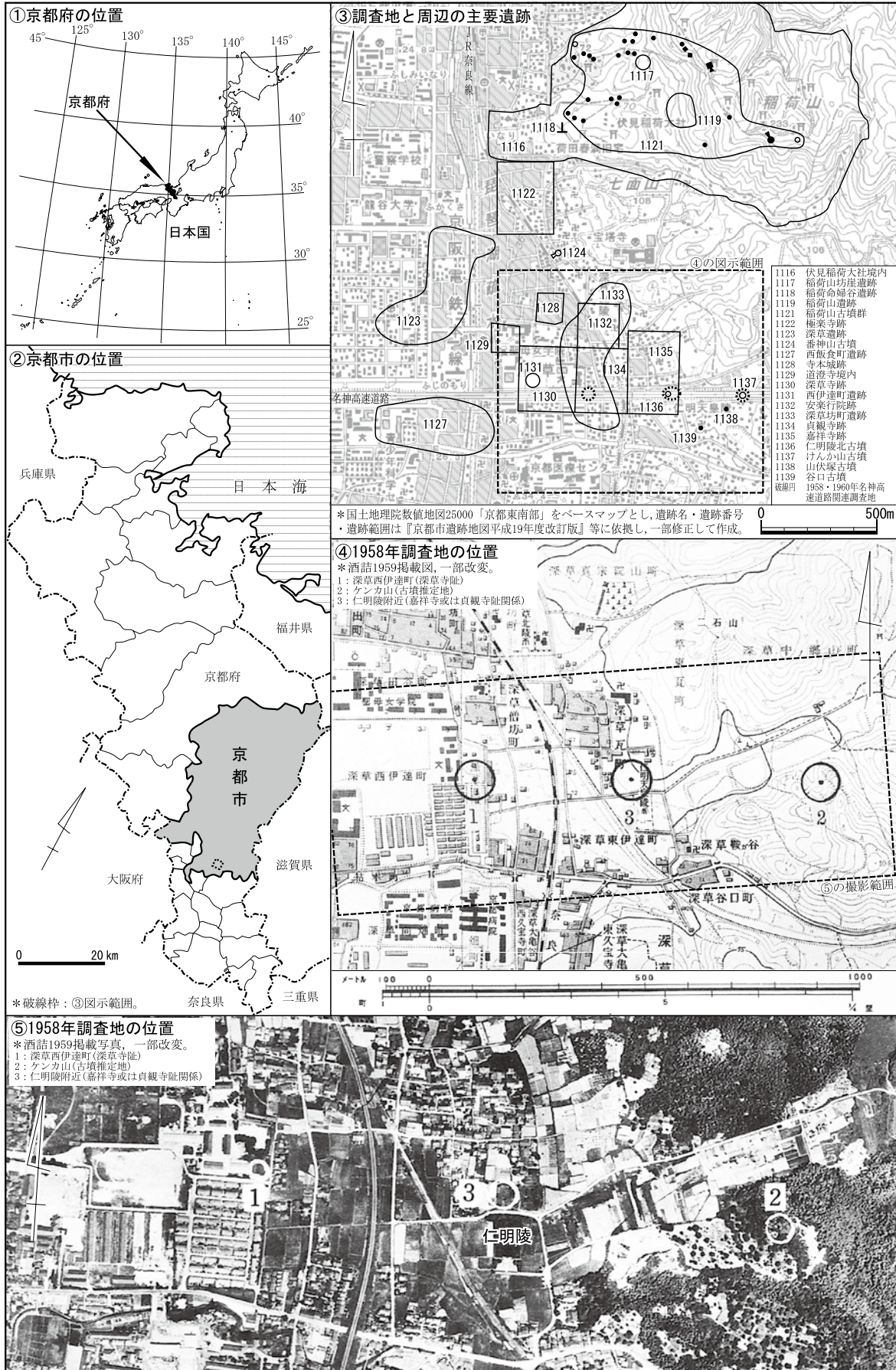


図1 調査地の位置 (1)

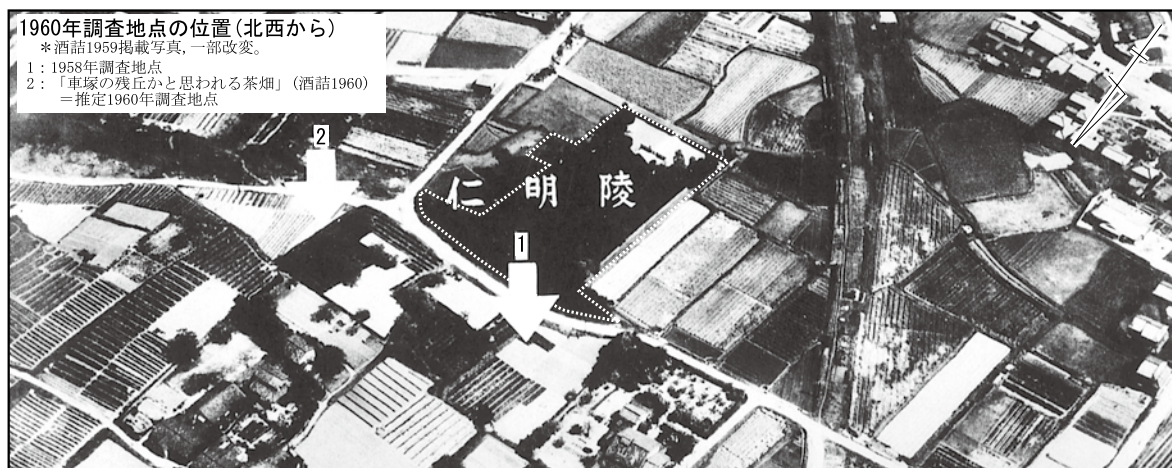


図2 調査地の位置(2)

調査地点の具体的な位置は仁明陵の北西側隣接地だったことが「概要報告」掲載写真から判読できる(図2-1)。また、「概要報告」によると、当初古墳の有力推定地と見こんでいた仁明陵北東側地点(図2-2)は土地買収の都合で調査できなかったという。そのためか、調査の結果、当初の目的であった寺院址・古墳は検出にいたらなかった。ただし、「概要報告」によると、「移動された土の中から、埴輪破片(中略)の破片数点が採集され」(p.23)ている。そこで、今回の資料調査では当該年の出土資料を探索したが、識別できなかった。

1960年の調査 翌1959年末には、昨年度調査できなかった名神高速道路計画路線中の「仁明陵北側地点」(図2-2)の土地買収が完了し、1960年1月4日～2月24日の間、この地点の発掘調査が実施された。当該調査の正式報告書は未刊である。しかし、調査直後の日本考古学協会第25回総会で調査経過の略報が発表され(酒誌他1960、以下「略報」)、同年には調査担当者の一人である波多野忠雄氏による調査速報も提示されており(波多野1960、以下「波多野報告」)、調査の一端を知りうる。ただし、「略報」と「波多野報告」との間には記述に齟齬がある。ここでは記述が詳細な「波多野報告」をおもに参考にして、埴輪の出土状況を跡づけたい。

〔調査区の配置〕調査は「東西南北に通る長い試掘溝を設定し、遺物や遺構のあらわれる状態を見て、次第に中心に向かって掘る方針」(p.33)で実施された。具体的には、南北方向の試掘溝(A・Bトレンチ)と東西方向の試掘溝(C・Dトレンチ)を設定し、これらが「囲む地区を四つに分けて、西北をA区、東北をB区、西南をC区、東南をD区とし、それぞれ調査がすすめられた。

〔埴輪出土状況〕「波多野報告」のなかから、埴輪にかんする記述を確認しておこう。

「(前略)Cトレンチでは、約三十糎の厚さに及ぶ黒褐色の有機質を混じた表層土を剥ぐと、砂質埴壤土(STL)から約五十糎の間隔を置いて一列に並んだ円筒埴輪(楕圓との形象埴輪片を含む)の破片群が出て来た。それは東へ進むにつれて夥しい数量に達し、その配列は少し北へ曲がる徴候を表したが、この地層は隣に来た細礫を雑える黄灰色の壤質砂土(LFS)と急に代わったので、埴輪列は不定になり遂に消え果てた」(p.33)。また、Dトレンチで確認された「石敷き」が「BD両区を主としてA区やC区にも広が」(p.34)るので、「設備の意図と埴輪列との関係を求めるために各

トレンチを再び深く掘り下げたところ、専らCトレンチより無数の埴輪の破片が近世の瓦当の細片と混合して」出土し、また「Cトレンチの埴輪の序列は、攪乱層に包まれているのみならず、偶然にも茶株の根茎の配列と合っていて、その周りに恰も一個体の埴輪を感じせしめる様に集っていた」(p.34) という。そして、波多野氏は「(前略) 諸文献から推した古墳は、今回の発掘地域には遺っていない事がはっきり」するとともに、出土埴輪片が「この近くで生れた一基または複数の古墳の前に消え失せたか、或は現に残っている」(p.34) 可能性を示唆するとした。

小 結 かざられた記述からではあるものの、以下の諸点を確認することができる。

- ①埴輪はCトレンチを中心に出土した。
- ②埴輪の出土状況は、破片群が「約五十種の間隔を置いて一列に並ん」でいた。
- ③埴輪は近世瓦と「混合して」出土した。
- ④埴輪は攪乱層につつまれ、また茶株の影響もうけていた。

このうち、②は古墳周溝内に埴輪が落ちこんだ状況を反映するとみる余地もあろう。しかし、後世の影響を受けた可能性をしめす③・④を考慮すると、その想定には容易にしたがえない。やはり波多野氏が導出した解釈が現状では穏当とかがえる。

3. 埴輪資料の内容 (図3・4)

資料化の方針 本資料の分量はコンテナ6箱程度で、大半は図示しがたい小片であった。確認できた器種は円筒埴輪(普通円筒埴輪・朝顔形埴輪)・形象埴輪(家形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・石見型埴輪・人物埴輪・不明埴輪)である。以下、まず胎土・焼成・色調等の共通属性について記述したのち、器種ごとに内容を記述する。

【胎土・色調・焼成】胎土は直径1～3mm程度の石英・長石等の亜角礫を包含する例がおおい。色調は淡灰褐色から淡橙褐色を基調とする。焼成は無黒班土師質焼成である。

円筒埴輪 数量的に卓越するものの、いずれも破片であって、全形をうかがうにはいたらなかった。

【器 種】口縁部が確認できたので、普通円筒埴輪以外に朝顔形埴輪の存在がわかるものの、それ以外の部位では両者を区別できない例が大半をしめる。確実に朝顔形埴輪と判別できた破片を提示し、それ以外は普通円筒埴輪の記述のなかで一括してあつかった。

【朝顔形埴輪】二次口縁部の端部片(1～3)、一次口縁・二次口縁境界付近の突帯片(4)がある。1～3は端部付近をヨコナデで調整することで、外端面には凹みが生じる。この断面形状は普通円筒埴輪と共通する。外面は左傾ナナメハケで、内面はヨコハケで調整する。4は、突帯断面形状が低平な台形を呈する。この形状も他の胴部突帯と共通する。外面には左傾ナナメハケ調整をくわえる。内面はナデ調整を基調とし、一部にヨコハケをほどこす。

【普通円筒埴輪】すべて破片のため、全形・段構成をしりがたいので、部位ごとに記述する。

〔口縁部〕形態によって二つのグループに大別した。一つは、直立する口縁部の外端面付近に突帯を貼付するもの(5)である(口縁1類)(2)。もう一つは直立もしくは外反気味の口縁部で、

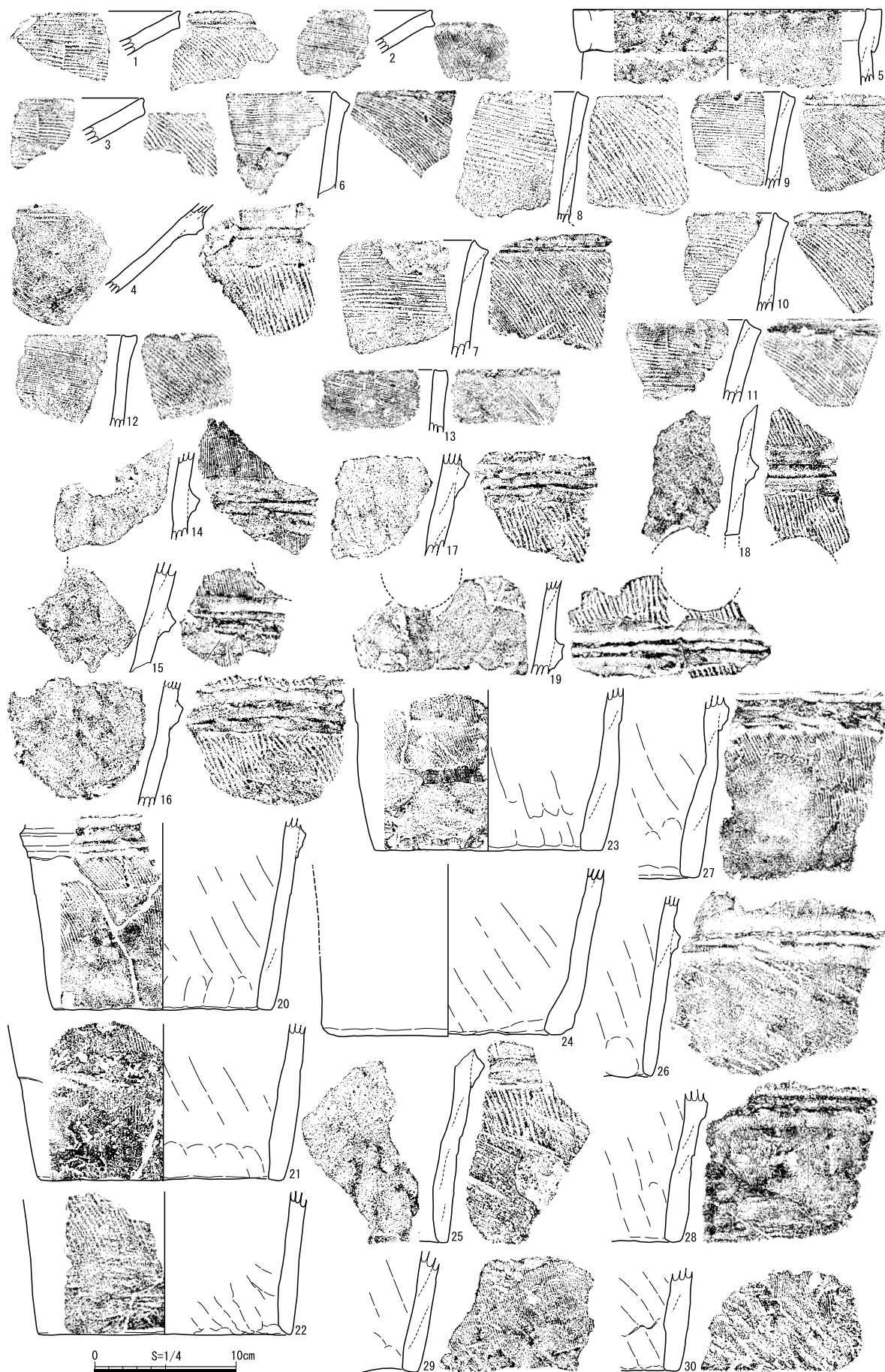


図3 埴輪実測図（円筒埴輪）

外端面付近に突帯をもたない一群（6～13）である（口縁2類）。量的にみると、口縁1類は1個体で、口縁2類が主体をしめる。口縁1類（5）は口縁端部外面に幅約3cmの低平な突帯を貼付する。突帯側面には、粘土帯を器面に押えつけたさいに生じた凹凸がのこる。外面は左傾ナナメハケで、内面はナデで調整したのち、上端部と内外面端部付近にヨコナデ調整をくわえる。口縁1類の器面調整は、外面を左傾ナナメハケで、内面をヨコハケで調整し、上端・内外面端部付近をヨコナデ調整する。

〔突帯部・スカシ部〕14～18は突帯部およびスカシ部の破片である。突帯断面形状は、上辺角部が下辺角部よりも突出する低平な台形を基調とする。突帯の貼付方式については、断続ナデA・B技法（川西1978、鐘方他1992）とも確認できなかった。15・18・19は、突帯をはさんで上下1段分が遺存する胴部片である。15・19は突帯の上段に、18は突帯の下段に円形スカシの一部がのこる。これらの胴部片の器面調整は、外面に一次調整としてタテハケをほどこし、内面は左傾ナナメナデによって調整することを基調とする。外面調整のタテハケは、ハケメ密度が粗い（2～3本/cm）一群と、細かい（約10本/cm）一群に大別できる。

〔底部〕底部高が高い（12.2～12.8cm）一群（20・25・27）と、低い（約10cm）一群（26・28）がある。底径は15.4～17.8cmに復元できる。突帯は、断面形状が低平な台形を呈し、台形の上辺角部が下辺角部よりも突出する点で胴部突帯と共通する。器面調整は、外面を左傾ナナメハケで、内面を左傾ナナメナデで調整することを基調とする。さらに、これらの外面下半に底部調整の板圧痕を確認できる例（20～23・25～30）と、確認できない例（24）がある。前者が量的に卓越し、後者は朝顔形埴輪とみるのが穏当であろう。底部調整については、板状工具端部の接面痕跡と目される左傾もしくは水平方向の段差が1段目外面に遺存し、それより下方は板状工具の接面によってハケメが不明瞭となる。一部に1段目突帯に板状工具が接触した例（26）もある。また、底部調整の板圧痕を確認できる例の場合、内面底端部側に接続するオサエ痕がしばしば確認される。これらは、板状工具の押圧時に内面にあてた指頭圧痕と目される。

形象埴輪 以下、器種ごとに記述をすすめる。

【人物埴輪】32は女子埴輪の袈裟状衣片である。粘土板をU字形に屈曲させた形態の破片であり、脇付近の袋状部分の一部に相当する。表面には、上下に直線紋をえがき、その内部に左行する綾杉紋を線刻して帯が表現される。表裏面ともにナデ調整される。31は小片のために確定しがたいものの、表面に32と類似した綾杉紋を線刻で表現しており、同一個体の可能性がある。

【石見型埴輪】34は形象部上段面の上辺部片で、表面にむかって上部の左隅付近に相当する。外面には、上辺と平行する上下2条沈線+鋸歯紋を線刻する。内外面ともに器面はナデ調整される。35は形象部と円筒部の接続部付近の破片と目されるけれども、具体的な位置を確定しがたい。34と同様に外面には上下2条沈線+鋸歯紋を線刻し、その下方に左傾する斜線を線刻でくわえる。表面の一部にタテハケメがのこる以外は、表裏面ともにナデ調整を基調とする。36は形象部中央帯の挟り部付近に相当する破片である。表裏面ともにナデ調整である。器面調整は、一面のナデが比較的丁寧である一方、もう一面は粗雑で、円筒と形象部との接合痕を確認できるほどであった。こう

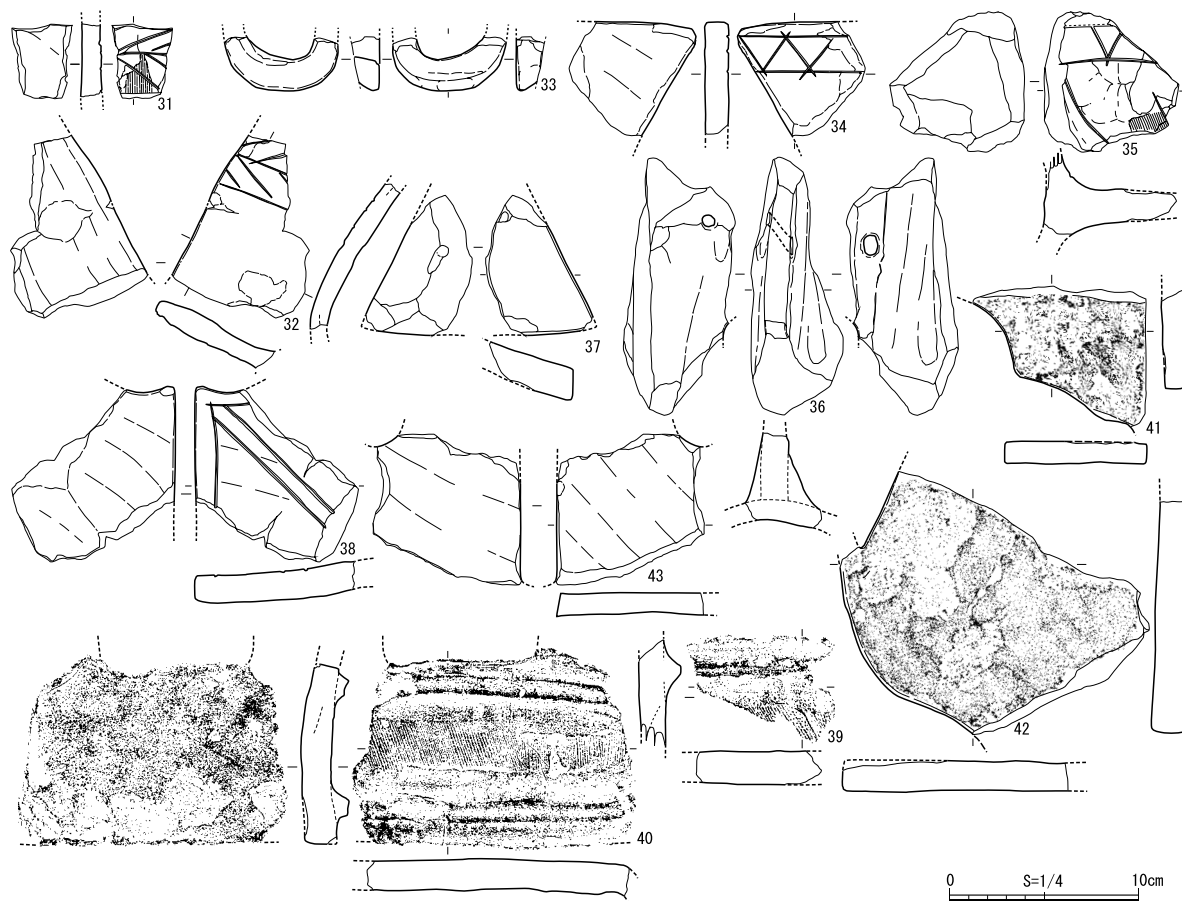


図4 埴輪実測図（形象埴輪）

した調整精度の相違によって、前者を表面、後者を裏面と判断した。また、小孔が表面側から裏面側へむけて傾斜して穿孔されている。円筒部破面で観察できた粘土紐接合痕は外傾接合なので、円筒部は倒立して製作されたとみて大過ない。33はU字形を呈する破片である。一側面には剥離痕跡がのこり、なにかに貼付されていたと想定できた。候補としては、馬形埴輪の障泥に貼付した笠の一部、あるいは石見型埴輪の形象部上辺中央にあるU字状突起付近を想定できる。当初は前者とかがえた。しかし、これ以外に馬形埴輪の破片はなく、ひとまず後者として想定しておきたい。

中央帯付近の破片と目される36は無紋であり、34と組みあって上段面上辺のみに上下2条横線+鋸歯紋のみをもつ個体を復元できる。類例として、長岡京市塚本古墳例（木村他1984）・木津川市音乗谷古墳例（高橋他2005）等がある。一方、35は相当する部分が確定できないものの、上下2条横線+鋸歯紋以外にさらに文様を付加した別個体の存在を示唆する。

【盾形埴輪】38は盾面の破片で、表面にむかって上部左隅付近に相当しよう。上辺は水平でなく、山形をなす。表面には、外周にそって1条の沈線による区画をえがき、隅部から右下へむけて2条1対の沈線による直線紋をくわえる。器面は表裏面ともにナデ調整である。

【家形埴輪】39は突帯を貼付した板状品である。断面に曲率がないので、壁体部片とみた。外面は左傾ナメハケによる調整、内面はナデによる調整である。突帯は断面三角形を呈する。40は壁体下部片と目される。板状品の外面上下に水平方向の突帯を貼付し、上部突帯の上端に接してスカ

シの一部が確認できた。また、内面の短辺一端には縦方向の剥離痕があり、壁体コーナー部に相当することがわかる。突帯は上下ともに断面台形を基調とする。器面調整は、外面が左傾ナメハケにより、内面はナデにより調整される。

【蓋形埴輪】41・42は立飾片と目される板状の破片である。器面調整はいずれもナデ調整による。また、明確な施文は確認できなかった。

【不明埴輪】37は三角形を呈する小片で、小孔が傾斜して穿孔される。器面調整はナデによる。形状と穿孔を有する点から、石見型埴輪の形象部隅部付近の破片ともかんがえた。しかし、器厚が約1.5cmと分厚く、全体に反りがある点で、その想定には違和感をおぼえる。よって、ひとまず不明品として報告する。43は板状を呈する破片である。表裏面をナデ調整する。家形埴輪の破片である可能性を想定したものの、やはり部位を確定しがたく、不明埴輪にふくめた。

時期の位置づけ まず、円筒埴輪は、明確に時期のことなる事例を見いだせず、一定のまとまりをもった資料といえよう。これは、本資料が複数遺構（古墳）でなく、単一遺構（古墳）に由来する可能性を示唆する。この点を確認したうえで、円筒埴輪の特徴をまとめると、以下のようになる。

- ①朝顔形埴輪と普通円筒埴輪があり、後者には通有の直立口縁と貼付突帯口縁がある。
- ②焼成は無黒斑土師質焼成を基調とする。
- ③器面調整は、外面一次タテハケ調整、内面左傾ナデ＋口縁部ヨコハケ調整を基調とする。
- ④板押圧による底部調整がある。
- ⑤スカシは円形スカシのみ確認したものの、配置・個数は不明である。
- ⑥突帯は低平な台形の断面形状を基調とし、断続ナデ技法は確認できない。

これらのなかで、②は川西編年Ⅳ期以降（埴輪検討会編年Ⅳ-1期）以降の特徴であり、③・④は川西編年Ⅴ期（埴輪検討会編年Ⅴ-1・2期）の特徴である。よって、本資料は川西編年Ⅴ期（川西1978）、埴輪検討会編年Ⅴ-1・2期（埴輪検討会編2003A・2003B）に該当し、古墳時代後期初頭から前葉頃とみなしうる。また、石見型埴輪をはじめとする形象埴輪の様相も、この想定とおおきく矛盾するものではないとかんがえる。

小 結 以上から、本資料は古墳時代後期に位置づけられる資料であることがわかった。出土状況にたいする解釈も加味すると、本資料から調査地点周辺における当該期の埴輪を有する古墳の存在が判明したことになる。この結果がもつ意味について、つぎに論をすすめよう。

4. 「仁明陵北古墳」と「深草瓦町古墳」－派生する諸課題

本資料の帰属先をめぐる認識の変遷 本資料の帰属先をめぐる認識について、調査後から現在にいたる間の変遷を確認しておきたい。前章であきらかにした本資料の内容をふまえると、現状で想定されている本資料の帰属先を再検討する余地があるとかんがえるからである。

【調査担当者の認識】調査担当者の一人である波多野氏は、後述する『撥雲余興』の記述－安政元年に近隣にある善福寺周辺で石釧・銅鏃・車輪石等の遺物が出土したという記述から想定され

る古墳は、出土「埴輪の破片群と一抹の関連を漂わせている」（波多野1960、p. 34）と指摘し、出土伝承遺物と本資料との関係を示唆した。

【森浩一氏の論説】調査担当者以外に比較的はやい段階で本資料について言及したのは森浩一氏であった（森1970）。森氏はまず当該地域の古墳について、以下のようにのべている。

「稲荷山の南西麓には前期から中期にかけての古墳群が復原される。これを深草古墳群とよんでおく。確実に遺跡の認められるのは、国鉄奈良線で寸断された西面の前方後円墳の番神塚が深草極楽町にある。その南東約六〇〇メートル、現在の仁明陵が築かれているすぐ北側で名神高速道路開設の事前調査が行われたとき、おびただしい円筒埴輪の破片が出土し付近に古墳のあったことを推測させた。この埴輪をもっていた古墳を深草瓦町古墳となづけておく。仁明陵の南東三〇〇メートル、浄蓮華院の境内に桓武陵の伝説が付会されたやや規模の大きい円墳がある。後期まで年代に下ることも考えられる。さらに仁明陵の東方約四〇〇メートルに車輪石が出土したと伝えるケンカ山がある。しかし名神高速道路開設前の調査では古墳の痕跡は見出せなかった」（森編1973、pp. 45-47）。

さらに、森氏は、これら遺存古墳以外にも、付近一帯における出土伝承遺物の諸事例や文献史料の記載に注目し、それらから推定される古墳として、以下の3古墳をあげた。

a号墳：極楽寺所蔵遺物群（変形六獣鏡・銅鏃15点）から推定される古墳。

b号墳：松浦武四郎編『撥雲余興』にしるされた、安政元年（1854）に山城国深草山出土とつたえる遺物（六花鏡〔内行花文鏡か〕・石製腕飾類（車輪石2点・石釧3・変形石釧1・紡錘車1）から推定される古墳。

c号墳：『延喜式』諸陵寮の後深草陵四至記載にある「大墓」、『三代実録』貞観8年12月22日条にある仁明天皇深草陵の四至記載中の「大墓」から推定される古墳。

そのうえで、森氏はこれらa～c号墳のいずれかと、あるいはa・c号墳と、本資料から想定される「深草瓦町古墳」とが同一古墳となる可能性を指摘している。

【田辺昭三氏の論説】1970年に、北山城地域全体を対象として首長墓系譜を抽出し、その動向を整理した田辺昭三氏は、深草地域の古墳について以下のようにまとめた（田辺1970）。

「京都盆地東南の一角を占める稲荷山とその西麓部には、深草稲荷山グループの首長墓が点在する。（中略）稲荷山の尾根にならぶ古墳に次ぐものとして、仁明陵北古墳（伏見区深草瓦町）がある。副葬品としては、伝世鏡と目される内行花文鏡・碧玉製腕飾り類・銅鏃などがあり、首長墓の系譜につながる古墳の一つであると思われるが、遺物がすべてこの古墳のものかどうか、多少の疑念もある」（p77）。

この記述によって、「内行花文鏡・碧玉製腕飾り類」（森氏のいうb号墳）と、「銅鏃」（森氏のいうa号墳）の帰属先として「仁明陵北古墳」という古墳が想定されたことがわかる。ただし、本資料の帰属先として「仁明陵北古墳」が想定されていない点には注意が必要であろう。

【認識の転換—遺跡地図における「仁明陵北古墳」】ところが、その後「仁明陵北古墳」が埴輪を有するという認識が遺跡地図で提示されるようになった。ちなみに、管見では仁明陵北側で埴輪が

出土した例は1958・1960年調査例以外に見いだしていないから、この「仁明陵北古墳」の埴輪とは本資料をしめすとかがえる。以下の議論はこれを前提とする。

こうした認識の変化が生じた時期については、まだ正確に把握できていない。だが、京都府内でも初期の遺跡地図である『京都府遺跡地図』（京都府教育庁指導部文化財保護課編1972）には、（番号）4135-4、（名称）仁明陵北古墳、（種類）古墳、（所在地）深草瓦町、（遺跡の概要）丘陵端 埴輪列、（出土品）埴輪円筒、銅鏃、変形六獣鏡、（文献）なし、（現状）全壊（p.175）と記載されるとともに、1958年調査地付近にドットが表示されている。すくなくとも1972年段階には、本資料の帰属先が「仁明陵北古墳」であり、かつ銅鏃・変形六獣鏡があげられていることから、森氏のいうa号墳が「仁明陵北古墳」と認識されていることがわかる。

ちなみに、同書の最新版である『京都府遺跡地図〔第3版〕第4冊』（京都府教育庁指導部文化財保護課編2004）では、（番号）1136、（名称）仁明陵北古墳、（種類）古墳、（所在地）伏見区深草瓦町、（遺跡の概要）埴輪列、（出土品）六咫文鏡・碧玉製腕飾類・銅鏃・埴輪、（立地）丘陵端、（時代）古墳前期、（文献番号）なし、（現状）全壊（p.41）と記載され、1958年調査地付近にドットが表示されている。出土品として、銅鏃・埴輪以外に「六咫文鏡・碧玉製腕飾類」がくわえられている。このうちの「六咫文鏡」が変形六獣鏡に相当するならば、基本的に1972年段階の認識が踏襲されていることになる。また、出土品にくわわった「碧玉製腕飾類」は、森氏のいうb号墳も「仁明陵北古墳」であるとみなされたことを示唆していよう。

一方、『京都市遺跡地図台帳』（京都市埋蔵文化財調査センター編2003）では、（番号）1136、（名称）仁明陵北古墳、（種類）古墳、（時代）古墳前期、（所在地）深草瓦町、（概要）全壊。標高40m、墳形不明。副葬品から首長墓系譜につながる古墳と考えられる（p.56）、と記載され、1958年調査地付近にドットがしめされている（図1-③）。具体的な出土遺物はあげられていないものの、所属時期を前期とすることからみて、森氏のいうa号墳あるいはb号墳、また両者いずれもの帰属先として想定されていると推察できる。ただし、埴輪にかんしては記述がない。

【遺跡認識の変化過程】このような遺跡認識の変化過程は、つぎの3段階にまとめられよう。

〔1段階：出土伝承遺物と埴輪との関連を示唆〕調査直後の調査担当者は、出土伝承遺物と出土埴輪との関係を示唆していた。

〔2段階：「仁明陵北古墳」の想定〕調査後約10年を経過し、森氏は出土埴輪の帰属先として「深草瓦町古墳」を想定し、出土伝承遺物と出土埴輪との関係を示唆したが、複数の出土伝承遺物のうちのどれが出土埴輪と関係するののかについては確言をさけた。田辺氏は前期から中期初頭と目される出土伝承遺物（森氏のいうa・b号墳）から、それらの帰属先として「仁明陵北古墳」を想定したが、本資料については言及せず、「仁明陵北古墳」は出土伝承資料の帰属先としての想定であった。

〔3段階：「仁明陵北古墳」が埴輪を有する認識の出現と踏襲〕田辺氏は、本資料の帰属先として「仁明陵北古墳」を想定したわけではなかったが、すくなくとも1972年には遺跡地図において「仁明陵北古墳」が埴輪を有するという認識が出現する。これは、田辺氏が出土伝承遺物の帰属先とし

て想定した「仁明陵北古墳」に、1958・1960年調査で仁明陵北側において埴輪が出土した事実が加味され、埴輪を有する前期古墳としての「仁明陵北古墳」という認識が成立したことをしめす。その後は、提示内容に若干の変動があるが、この認識が基本的に踏襲されている。

従来の遺跡認識の問題点と「深草瓦町古墳」の再提唱 仁明陵北側の1960年調査地出土埴輪は後期埴輪であるという前章での検討結果は従来の遺跡認識にたいして再検討の必要性を提起する。

まず、そもそも出土伝承遺物の帰属先として想定されたはずの「仁明陵北古墳」の名称で本資料出土地点を呼称することは、以下の理由で適当ではないとかがえる。

①出土伝承遺物から想定される「仁明陵北古墳」の時期は前期～中期前半頃であり、埴輪（本資料）から想定される古墳の時期（後期初頭～前葉頃）とは齟齬が生じる。

②出土伝承遺物から切りはなして、本資料のみの帰属先として想定した古墳を「仁明陵北古墳」と再規定するとしても、出土伝承遺物の帰属先として想定された経緯からみて適切ではないし、出土伝承遺物の帰属先に想定した古墳をどう呼称するのかという問題があらたに生じる。

この問題を解決しようとするさいに想起するのは、森氏が1970年に本資料の帰属先として想定していた「深草瓦町古墳」である。森氏は本資料の帰属先として「深町瓦町古墳」を想定し、それとは別に複数の出土伝承遺物についてそれぞれが由来する古墳を個別に想定したうえで、それらと「深草瓦町古墳」との対応関係を検討した。ここでは、現実のモノから想定できる帰属先と、伝承・文献史料等から想定される帰属先とを、別個の名称をつけることで明確に峻別したうえで、両者の関係を検討しようとする姿勢がつかぬかれており、参考にすべきとかがえる。よって、現時点では、出土伝承遺物の帰属先としての「仁明陵北古墳」とは別に、本資料の帰属先として「深草瓦町古墳」を想定する。つまり、両者を区別することを意図して、本資料の帰属先として、森氏がしめした「深草瓦町古墳」をあらためて提唱したいのである。

深草地域の首長墓系譜における「深草瓦町古墳」の位置 以上のとおり、本資料にたいする検討から、あらたに後期古墳としての「深草瓦町古墳」の存在を推定するにいたった。このことは、深草地域における古墳動向にたいする従来の認識に若干ながらも影響をおよぼすとかがえる。

丸川義広氏は、田辺氏が7グループに区分した京都盆地内の首長墓系譜案（田辺1970）をうけて、検討した結果、11グループに改訂した（丸川2002）。そのなかで、さしあたって問題となるのは深草グループである。丸川氏は「稲荷山の山頂に築かれた前期の古墳群は、前方後円墳と大型円墳の4基以上で構成される。山麓部には番神山古墳があり、さらに南にも大型の円墳がある。ここでは稲荷山の山頂から築造が始まる一連の首長墓系譜が想定できる」（p.100）として、当該地域に一連の首長墓系譜を想定した。そこには「仁明陵北古墳」にかんする記述はないが、編年表からは、番神山古墳に後続し、谷口古墳に先行する中期前半に位置づけられたことがわかる。出土伝承遺物の帰属先としての「仁明陵北古墳」の位置づけは丸川氏による想定が穏当であろう。一方、氏の編年表では後期初頭から前葉頃が空白期である。今回の検討によって、この空白期をうめる古墳一埴輪をもつ該期の首長墓として「深草瓦町古墳」を見いだしたわけである。

既知資料がすくなく不明瞭である地域であることをかかると、深草地域の古墳時代を検討

するうえで、本資料とそこから推定される「深草瓦町古墳」がもつ意義は小さくないであろう。

5. おわりに

以上の検討結果を箇条書きに要約し、まとめにかえたい。

①名神高速道路建設に関連して1960年に「仁明陵北側地点」において実施された発掘調査で出土した本資料は、ながらくその様相が不詳だったが、今回の検討により後期の埴輪と判明した。

②従来本資料の帰属先は、周辺での出土伝承遺物から想定された「仁明陵北古墳」であるとされ、「仁明陵北古墳」は出土伝承遺物の様相から前期古墳として周知されていた。しかし、今回の検討で後期埴輪であることが判明し、その帰属先として「仁明陵北古墳」を想定しがたくなった。そこで、森浩一氏が想定した「深草瓦町古墳」を本資料の帰属先として再提唱した。

③「深草瓦町古墳」は、当該地域の首長墓系譜上の空白期を埋める首長墓となる可能性を指摘した。

本稿で論じたこうした諸課題はおおいが、それらについては、今後機会をみてあらためて検討することを期して、ひとまず本稿をおえたい。

〔付記〕平成28年度に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ派遣され、寺町旧域調査に従事させていただくことになった。せっかくの機会なので、京都市の埋蔵文化財の調査研究になにかお役にたてればとかがえて本稿の執筆を思いたち、投稿をお願いしたところ、ご快諾いただいた。当初1年間の派遣予定であったものの、諸般の事情により半年で滋賀県へ復帰せざるをえなくなった。にもかかわらず、本稿を受理し、記念号たる本誌に掲載いただいた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、そして職員の皆様からたまわったご厚情に心から感謝を申しあげたい。また、本稿作成にかかる資料調査では、同志社大学歴史資料館の若林邦彦・浜中邦弘両先生と藤井咲子氏からはご高配をたまわり、山田邦和先生・河内一浩氏・宇野隆志氏からはご教示をいただいた。皆様には衷心より感謝を申しあげる。採拓にあたり助力をえた井上智代氏にも感謝を申しあげたい。

註

- 1) 1960年調査担当者である波多野忠雄氏による調査速報(波多野1960)は「深草遺蹟の発掘」と題され、調査ときに調査対象遺跡を「深草遺蹟」と称しており、そのこともあって資料館目録には「深草遺蹟」として搭載されている。だが、本資料出土地点は現在行政上での周知の埋蔵文化財包蔵地である「仁明陵北古墳」(京都市埋蔵文化財調査センター編2003)付近に相当し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「深草遺蹟」は別の遺跡となっている(図1-③)。ここでは「深草遺蹟」と括弧付けをして、あくまで収蔵資料名としてもちいた。
- 2) 口縁1類については、倒立技法によって製作された形象埴輪底部に該当する可能性も否定できない。

文献(著者名・機関名50音順、刊行年順)

宇野隆志 2009「稻荷山周辺の古墳時代」『朱』52、伏見稻荷大社

鐘方正樹・中島和彦 1992「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

- 1991』奈良市教育委員会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古學雑誌』64-2、日本考古學會
- 木村泰彦・近沢豊明 1984「第6章 長岡京跡右京第106次調査概要（7ANKHT地区I）」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
- 京都市埋蔵文化財調査センター編 2003『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局
- 京都府教育庁指導部文化財保護課編 1972『京都府遺跡地図』松香堂
- 京都府教育庁指導部文化財保護課編 2004『京都府遺跡地図〔第4版〕第3冊』京都府教育委員会
- 酒詰仲男 1958「第二 深草地区の遺跡発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会
- 酒詰仲男・千代 肇・波多野忠雄 1960「京都市伏見区深草仁明陵北側地点発掘経過略報」『日本考古学会第25回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 高橋克壽・村上 隆・佐藤昌憲・佐々木良子 2005『奈良山発掘調査報告Ⅰ 石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査』（奈良文化財研究所学報第72冊）独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 田辺昭三 1970「第1章 古代の曙光 第3節 古墳と県主 首長墓の成立」『京都の歴史1』學林書院
- 波多野忠雄 1960「深草遺蹟の発掘」『古代文化』5-2、財団法人古代學協會
- 埴輪検討会編 2003A『埴輪論叢』4、埴輪検討会
- 埴輪検討会編 2003B『埴輪論叢』5、埴輪検討会
- 丸川義広 2002「京都盆地における古墳群の動向」『田辺昭三先生古稀記念論文集』真陽社
- 森 浩一 1970「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地—古墳終末への遡及的試論として—」『古代学研究』57、古代學研究會（森編1973に加筆再録）
- 森 浩一編 1973『論集終末期古墳』塙書房